ホメロスにおける xeinosについて ——— その1

根本英世

はじめに

自己とは異なった身体的外観・言語・文化等を持つものに対する特殊な感情は、今日なお世界の至る所に様々な形で見出されるが、近代社会と比較して外部との交渉が少ない古代社会或は未開社会においては、更に根深いものとして存在してきた。この「外からの者」は、例えば、未開社会の研究からは、外部から悪霊をもたらす「穢れた存在」と規定されたり(1)、或は我が国の国文学・民俗学的研究によれば、土地の精霊たちの害から村人を守る元来は「神」なるまれびとと解釈されている(2)。各民族のこのような態度は ——— そこには状況による揺れや歴史的変遷も当然看取されるが ——— 各々の社会の在り方と密接な関係をもつ：「外なるもの」への対応には屡々「内なるもの」の本質が窺われるからである。すなわち「対応」が「礼儀・礼譲civility」の表出の一種である以上、それ自体が「文明civilisation」の一部と考えられよう(3)。

「語」というものは普通、その本来指し示すものreferentを越えて、絶えず新しい意味領域を獲得していく。すなわち語の内包的意味 connotative meaning は固定したものではないため、「語義」を正確に定めるには語源論のみに頼ることはできない。古代ギリシア語でも、元来は「外国人」を意味するとされるxenos（ホメロスではxeinos）は多様なコンテクストにおいて用いられた。本稿ではホメロス（以下Hom.と略）におけるこの語の用例を、ときには後代の文献を参照しつつ、検討し、「Hom.の社会」のxeinosについての考察を試みる。

その際xeinosからの派生語及び後代の用例も考慮する予定である。

I

いまHom.の作品を「イリアス」（以下 Il. と略）と「オデュッセイア」（以下 Od. と略）の二つに限定すると、xeinosの語例は、単・複数及び全ての格を含め213箇所に見られる。その内訳はIl.で12例、Od.で201例であるが、その使用されている意味のレヴェルは様々であり、ときには通例とは全く矛盾した用法も見られる。ここでは先ずIl.におけるその用例について検討してみたい[4]。

24.202 「まあどうしたことでしょう、あなたの御思慮はどこへ行ってしまったのでしょう、以前は／それゆえに、xeinosたちにも御支配下の人々にも、名声を博していましたものを」これは息子ヘクトルの死体を引取りにアカイア陣営に出掛けたものかどうか、相談するプリアモスに対して妻ヘカベが、夫の考えを無謀として止める言葉である。プリアモスの思慮が国の内外を問わず、遍く知れ渡っていることを強調するのであるから、このxeinosは「異邦の人」「外国人」である。そしてこれがxeinosの元義であることは説明を要しまい。しかしこの意味での用例はIl.ではこの箇所のみである。

4.377 「しかしながら彼（テュデウス）は、戦とは別にミュケナイに来たことがある／xeinosとしてだが、神さながらのポリュネイケスと一緒に・・・」テュデウスがミュケナイに来た目的はテバイ遠征のための援軍を仰ぐためであった。彼の目的は一時成就するかに見えたが、ゼウスの示した不吉な兆しにミュケナイ人は援軍派遣を拒絶する（380f.）。ここのxeinosは「外国人」ではありえない：叙事詩の聴衆には、彼がアイトリア人の子孫であることも（399）、英雄ディオメデスの父親であることも（2.406 et passim）よく知られたことであるから、ミュケナイにおける彼を「外国人」として改めて説明する必要はな

いからである。また彼とミュケナイとの関係が聴衆に前提とされていたことを示す伝承が明瞭な形で伝わらない以上、この箇所の xeinos は、スコリア BTがOd.8.208の例を挙げて解釈するように、単に「客」と理解すべきであろう。

上に挙げた引用文はアガメムノンが戦場でディオメデスを、その父テュデウスの昔日の勲業エピソードを語りつつ、叱咤激励する際の言葉であるが、物語はさらに続く。

4.387 「しかしその折りxeinosではあるけれど、馬を駆るテュデウスは少しも／たじろがなかった、大勢のカドモスの後裔たちの間に唯一人であるというのに‥‥」

上述のようにミュケナイで援軍を断られたのち、遠征軍はテュデウスをテバイへと送ることになるが、彼がそこで数々の競技に参加してテバイ人を打ち負かす様子が以下で語られる（389f.）。この箇所のxeinosはどのようなニュアンスをもつのか。問題は、彼が如何なる資格でテバイに居たのか、である。まず彼がテバイの人ではないことは自明である。さらに彼らのテバイ遠征の目的は追放された王ポリュネイケスの王位復権であった。加えてこの直前 384 の enth' aut' angelien epi Tyde steilan Achaioiを考慮すれば、ここのxeinosは単なる「外国人（或はよそ者）」とは考えられない[5]。少なくともアカイア人側はテュデウスを「使者」として、ポリュネイケスの王位復権に関する正式な「交渉者」として、派遣しているのである。両陣営が敵対している（事実この交渉は決裂し、「テバイ攻め」が行われるのであるが）以上、「賓客」とするには些か抵抗があるとしても、彼はテバイ側にとっては敵からの「軍使」、礼節を以て遇すべき「客」に違いない。すなわちここでは「客」とは言条、単身敵の陣営にあって敵たちを競技で負かすテュデウスの剛胆さが、讃えられているのではないか。

Il.で xeinos が「客」の意味で用いられている箇所として、以上の他には、

11.779、13.661、17.150、17.584 が挙げられる。11巻の例はネストルがパトロクロスに語る昔話の中で、老王一行がペレウスの館を訪れた折り、「アキレウスが ···· xeinia を並べてくれたが、それは xeinos たちに対するきまり·····」[6]と追憶される條である。引用文中の傍点部に類似した表現は、Od.にも一度見られるように、半ば定型化したものであるが、このことは古代ギリシア社会、少なくとも「Hom.の社会」の在り方を考える上で、ひとつの方向を示す。

13.661の例は、トロイア方となって参戦したパプラゴニアの王子ハルパリオンが、メリオネスに討たれて死ぬ、その死に対してパリスが憤る箇所である。「彼が殺されるとパリスはたいそう激怒した。／というのは彼（パリス）は多くのパプラゴニア人の中にあって彼（ハルパリオン）のxeinosであったことがあるからである。／その死に怒れる彼は青銅の鋤をつけた矢を放った。」 この箇所のxeinosを「主人」「もてなし役」と解して、「彼（ハルパリオン）は彼（パリス）の主人を勤めたことがあるから」と訳す学者もいるが[7]、これはどのような根拠に基づくのか、またその意図も不明である。口承叙事詩という性格を考慮した場合、僅か3行の間に主語を2度も変えるというのは不自然ではなかろうか。吟唱詩人の口から次々と流れ出る韻文を理解することと、句読点を施され文字化された詩行を読むことは、厳密に区別されなければならない。Il.Od.のような作品は、可能な限り行単位で理解し、特別な理由がない限り主語の無闇な変更は慎むべきであろう。660の主語は原文に明示されており、662の場合も主語はコンテクスト上“パリス”以外に考えられない。この2行に挟まれた661の主語は当然“パリス”と解すべきである。従ってこの箇所のxeinosも「客」を意味するものと云えよう。

17巻の2例は確かに「客」ではあるが、上の例とは少々異なったニュアンスをもつ。17.150を見てみよう。「ひどい人間だ、君はxeinosにして僚友なるサルペドンを／アルゴス人たちの餌食とし、掠奪に遭うままに、抛ったらかしにし

てきたのだからな。」これはグラウコスがヘクトルの冷酷さを難じる條である。傍点部の原語は hama xeinon kai hetairon だが、ホメロスにおける hama･･･kai･･･という語法からみて、ここの xeinos と hetairos はかなり近似した意味で用いられているものと思われる[8]。もーつの例 17.584「（パイノプスは）彼（ヘクトル）にとってはすべての／xeinos たちの中でもっとも大切philtatos であった」においても、philtatos という語の特異性を考慮すると[9]、xeinosは単なる「客」以上のものを示していよう。すなわちこの2例には、「客」として迎え容れたのちに「親友となった者」が含意されているのではないか。

xeinosは以上に述べた「異邦人」「客」の他に、さらに次のようなコンテクストでも用いられる。

6.215 「それでは君は、私にとっては昔から続く父祖代々の（patroios）xeinos だということになるぞ。」これは戦場で敵同士として相見えたディオメデスとグラウコスが、後者が長々とその家系について語ったため、互いにxeinosであることが判る條である。すなわちグラウコスの祖父ベレロポンテスはかってディオメデスの祖父オイネウスの館に二十日間も厄介になり、別れ際に互いに贈り物を交換し合った仲であった（6.216f.）。このため両人はここで闘いを止めて、「自分たちが父祖代々のxeinosであるのを誇りに思っているのを両陣営の者たちが知るように」（6.231f.）と、互いの武具を贈り合うことになる。このようにHom.の社会では敵味方に別れていても、互いの祖先の関係が判明すれば、その信義を新たに強めることのほうが大切とされた：「両陣営の者たちが知るように」とは、社会そのものがそれを認容していることを示すものと考えてよい。ここにはその社会の価値観が反映されている。ひとたび結ばれたこの関係は如何なる状況下にあっても何物にも ――― たとえそれが生死を賭けた戦闘であっても ――― 優先する。

交通が不便で治安も確立されていない社会で外来の者が土地の人に保護を受

けた場合、その関係は、その場限りのものとして終わることもあろうが、Hom.の社会では非常に強い絆として当該の両者を結びつけた。これは当人の世代だけでなく、親から子へ、子から孫へと受け継がれる。すなわち「主客の関係」は世襲のものなのである。恩義に基づくこの関係を遵守することは、当人たちにとっては異邦の地を旅する際、己が身を守る一種の「私的な保険」であったのかも知れない。しかしそれが社会の認めるところ、慣習・制度となっている点に、この社会の特徴を見ることができよう。従ってここのxeinosは「異邦人」でも「客」でもなく、「客人関係にある者」と理解しなければならない。

この意味での用例は他に21.42が挙げられる。「更にそこから彼（リュカオン）を解放してやった、多大な財を支払ってやったのだ、xeinos なる／イムブロス島の人エエティオンが･･･」 或る晩プリアモスの息子リュカオンが父の果樹園で戦車の台材を求めていたところ、突然アキレウスの夜襲に遭遇し、捕えられる。戦での捕虜は自由を奪われ、 隷属の日々を送るのが当時の常則 （cf.6.455,6.463）、リュカオンも身を売買される境遇に落とすことになるが、この彼を異邦の地で救ったのは、プリアモスと「客人関係」にあったエエティオンであった(10)。

ところで6巻で互いが「客人関係」にある者同士であることを知ったディオメデスはグラウコスに次のように語り続ける。6.224「（ペロポネソスの）中枢なるアルゴスにあっては私が君の親しきxeinosとなり、／リュキアにあっては、私がそちらの土地へ行ったときには君が（親しきxeinosと）なるのだ。」ディオメデスの故郷はアルゴスであるから、彼がそこでxeinosとなる、とはこの語の元義「異邦人」と照らしても、また転義「客」と較べても、奇異な印象を与える。さらに「客人関係にある者」と考えても、当然過ぎるため表現は冗長になるだけで、文意は明確でない。ここは「主人役」ほどの意味と考えるべきであろう：これでは「客」の対立語となってしまうが、この用法は他にも例が見

られるのである。メゲスが戦場に纏って来ている武具の由来が語られる折り、15.532に以下の表現がある。「すなわち（武具を）もののふたちの君、xeinosなるエウペテスが彼に与えたのだ。」そのかみメゲスの父ピュレウスがセレエイス河畔エピュレの地にあったおり、エウペテスが敵の戦士から身を守るべく戦場に携えて行くように、と呉れた武具であった。この場合ピュレウスは「異邦人」としてエピュレの地に居たのだから、両者の「古くからの客人関係」を物語る伝承が存在しない以上、エウペテスの同格語 xeinos は「異邦人」たるピュレウスをもてなす人、すなわち「主人役」と解するのが適当であろう。

II

以上がIl.に現れるxeinosの語例すべてである。その意味がコンテクストによって様々に変化することが示されたものと思う。元来は「異邦人」を示していた語が、外からやって来て「客」とも「親しい人」ともなり、ある場合には世代を越えた「客人関係にある者」となった。さらにこの語は、異邦の地を訪れる客人関係にある「客」だけではなく、この関係の他方の担い手「主人役の者」まで意味するようになったのである。

しかし上のxeinosの用例の背景には注目すべき点がある。「客人関係にある者」を意味する例も、「主人役」の例も、平和時のエピソードを回顧する際のものが格段に多い。現実の時点におけるxeinosが問題となるのは ― より具体的には１人称もしくは２人称で用いられているのは ― 僅かにディオメデス・グラウコスのシーンに過ぎない。また「客」といっても、実は援軍を求めるための交渉役、或は軍使であったり、さらにはサルペドンのようにトロイア方の「客」将であったりする。すなわちこの語はIl.では「非日常」的或は「軍事」的コンテクストにおいて用いられることが多いと云えよう。

ところで日本語の「外国人」に相当するギリシア語には、他にbarbarosがあるが[11]、xeinosは異民族に限らず、ポリスを異にする者すべてに対して用いられた。では古代ギリシアでは、上の例のように、よそのポリスから来る者は常に暖かく迎えられ、優遇されたのであろうか。異文化に関する情報に溢れ、義務の面でも責任の点でも匿名性が顕著な現代社会とは異なり、「自己」対「他」の意識をなまの形で持つ人間の集団である古代社会で、共同体構成員以外の者に対するネガティヴな感情が露呈されないということがありうるだろうか。

「放浪の旅にあってさえ、人間すべてが互いに対し、いかに家族的且つ親愛に満ちたものであるかを、知ることであろう。」 これはアリストテレスの言葉であるが（EN 1155a21f.）、確かに一般論として、古代ギリシア人が xenos に友好的であったと云うことはできよう。またその具体例は、クセルクセス軍に脅かされた際のアテナイ民会の決議にも見られる。すなわち攻め寄せるペルシアの軍勢に生命の危険を感じた市民は、テミストクレスの動議により「…すべてのアテナイ人、アテナイに居住するxenosたち、婦女子は、トロイゼンに移住すべし…」[12]と取り決めた。刻々と迫る国家滅亡の危機の中でxenosたちにも自国民と同様の保護を与えるアテナイ市民のこの態度は評価されよう。しかしアテナイは、ペリクレスの演説にも見られるように（Thuk.I144.2 et II 39.1,cf.II37.1）、xenosには開放的なポリスであったことを斟酌する必要はある。

「私の知るところでは、このため昔外国人追放制度xenelasiaが生まれ、市民は国外に出ることを許されていないが、それは彼らが外国人によって安逸の風に染まらぬように、とのためである。」 これはスパルタの国制について述べるクセノポンの言葉であるが、スパルタにこの制度が存在したことは他の資料からも確認される[13]。この制度が実際どの程度の効力と頻度をもって施行さ

れたかは判然としないが[14]、スパルタはアテナイと比較して確かに閉鎖的であったし、外国人へのその市民権授与も或る時期までは非常に稀であったとされる。しかしこのスパルタにして外国人を全く入国させなかったわけではなく、外国人接待の役人さえ置いていたことは銘記されねばならない[15]。また一見開放的なアテナイと雖も、外国人の「不動産所有」は制限を受け、訴訟手続きの点でも市民よりは不利に扱われており、外国人が無制限に滞在することに対する批判もあった[16]。

上に挙げたのはいずれも古典時代の資料だが、xenosに対する姿勢には建前と本音があることに留意すべきであろう。Hom.の社会では個人とポリスとの結びつきは強く、市民が自分のポリスの外に居るのは特殊な場合、と考えられているため[17]、xeinosに対する意識は好意的なものばかりだとは考えられず、また「社会」である以上ネガティヴな感情も存在しないはずがないのではないか、という疑問が生じるのである。

事実この例は、僅か２箇所だが見られる。9.647「アルゴス人の面前で私に侮辱を加えた、／アトレウスの子が、（私を）何か蔑むべき居留者であるかのように」　この表現は16.59にも見られ、アキレウスがアガメムノンを非難する際の言葉だが、居留者metastesの字義は「移り住んで来たもの」であるから、外来者である。しかし上の文意は、外来者に対してならば狼藉が許されるということではなく、自分が将としての体面を傷つけられたことをアキレウスが強調しているものと見るべきであろう[18]。

24.202の「異邦の人」が無色であるのを含め、ともかくIl.にはxeinosのネガティブな用例も、外国人に対する特別な反応も見られない。これはある意味では異様なことだが、Il.という作品の「軍事的」色彩、換言すれば「非日常性」を考慮すれば納得できることではないか。すなわちそこに描かれているのは、祖国を守ろうとするトロイア方と、トロイアを攻め落としてヘレネを奪還しよ

うとするギリシア軍の姿である；10年もの間故国を遠く離れ、さらにアキレウスの戦線離脱により、彼らには厭戦気分さえ支配的になり始めている。またトロイア方にしても、 その未来への展望はほとんど絶望的なものになっている（6.447f.）。にも拘らず、日々命を賭けて戦闘を繰り返さねばならぬ集団が、ここには描かれているのである。Il.の登場人物は、日常的な市民生活からは無縁の、緊張の極度にある。これは「社会」の通常の在り方ではあるまい。

本稿Ⅰ冒頭でxeinosの語例がIl.とOd.とで極端に偏っていることを示した。これまでの考察より、この語例の頻度差は、両叙事詩の性格の相違を何らかの形で反映しているのではないか、すなわちOd.にはIl.には見られぬ、多様性に満ちた、より日常性に溢れた「社会」の展開が存在するのではないか、という推量を促すが、Od.については次稿で論じたい。

注

(1) Frazer, The Golden Bough, ²1922, New York, 194-198.

(2) 折口信夫「国文学の発生（第三稿）」（中央公論社版全集、第1巻所収）。

(3) 横山俊夫『節用集と日本文明』、 梅棹・石毛編「近代日本の文明学」（中央公論社、1984年）所収、殊に66以下参照。

(4) 以下引用の際の数字は当該語句が用いられている行数を示す。また引用訳文中の／は行の変わり目を示す。

(5) 例えば Ameis-Hentze, Homers Ilias, ⁸1927, Berlin, ad loc. は "Fremdling"、またLeaf, The Iliad, ²1900-2, London (=rep.1971, Amsterdam), ad loc. は "stranger" とするが、これでは漠然としすぎている。むしろ

Leaf の続く言葉「この状況下では実質的には敵を意味している」を発展させて「敵の使者・敵陣営からの客」と解してもよいと思われる。

(6) ここで「きまり」と試訳した語 “themis” はコンテクストによっては「慣習」「権利」.「義務」と様々に解せる。仮に「義務」とした場合は原文のxeinoisは後述の「主人（側）」に分類されよう。なお xeinia については後述。

(7) 例えば Paley, The Iliad of Homer, vol. II, 1871, London、Hampe Ilias, 1979, Stuttgart、Rupé, Ilias, [5]1974, Gernsbach 等。

(8) hama (te)…kai…（或はhama te…te）のホメロスにおける用例を検討すると、①同一概念（e.g. Il.1.417 hama t'okymoros kai oizyros）、②類似・近似の概念（e.g. Il.13.299 hama krateros kai atarbes）、③対立概念（e.g.Il.4.450 ham'oimoge te kai euchole）を、導入する際に用いられているものと分類できる。Il.16.505や24.773などは一見異なったレヴェルの概念が並置されているようであるが、その意味内容を考慮すれば上の分類には不都合でない。またこの句の用法としては②が圧倒的に多い。

(9) cf. Gauthier et Jolif, L'Éthique à Nicomaque,[2]1970, Paris, tome II 655ff. 殊に656.

(10) スコリアBTは「彼（エエティオン）が以前客人として遇されたので自由にしてやった」と説明している。なおこのエエティオンはアンドロマケの父の同名人（ミュシアのテーベ王）とは別人である。

(11) 夙に知られているようにbarbarosなる語には元来ネガティヴな意味はなく、その喋る言葉の擬音に由来する（e.g.Vidal-Naquet,The Black Hunter, tr.by Szegedy-Maszak,1986,London,3-4）。Hom.には“barbarophonon（異語を喋る）カーリア人たちを”という形容詞が1例見られるだけで（Il.2.867）barbarosは用いられていない。そもそもホメロスに「ギリシア人対異民族」という意識がどの程度あったのか不明である(cf.Thuk.I3.3)。だがヘラクレイトスで

は既にネガティヴな意味になっているとされる。cf.H.Fränkel,Wege und Formen frühgriechischen Denkens,[3]1968,München,261.

(12) "Athenaiu/s d'hapantas kai tus xenus tus oikuntas Athenesi / ta tekna kai tas gynaikas eis Troizena katathesthai" テクストはMeiggs & Lewis, A Selecton of Greek Historical Inscription, 1969, Oxford, No. 23,ll.6-8 に拠った。1959年に発見され、1960年に M.Jameson により Hesperia誌 (XXXIV) に発表されたこの碑文の真偽については様々な論議があったが、現在は、テミストクレスと同時代のものではないにせよ、本来のものと大きく異なることはないと認められているようである。なおテミストクレス動議によってアテナイから移されたものを、Diod.Sic.11.13.4 は「婦女子及び（運搬）可能なかぎりの必需品」、 Nepos Them. 2.8 は「移動できるすべての財」、Plut.Them.10.4 は「婦女子」としており、「xenos」を挙げるのは寡聞にしてこの碑文だけである。

(13) Xen.Laced.Pol.XIV4, cf.Thuk.I144.2 et II 39.1, Aristoph.Av.1013-16, Pl.Leg.950.

(14) cf.Thuk.I144.2. 例えばこの制度を導入したと伝えられる(Plut.Lyk. 27)リュクルゴス自身がクレタ島から賢人にして詩人タレスをスパルタ市民教化のため招いている(ibid.4 このタレスはミレトスの哲学者とは別人)。またどのような手続きによって xenelasia が効力を発したのかも不明、"エポロイが適当と認めたら、直ちに"と註する Classen, Thukydides,[5]1919, Berlin, ad I 144.2 の根拠も不詳。

(15) Hdt.VI57. 官職名は proxenos: 他のポリスではこの語は、特定の外国からその市民の保護を委嘱された人（今日の「名誉領事」に相当）を意味したが、スパルタの場合は官職として王が任命した。cf.Busolt, Griechische Staatskunde, 1920, München, Bd.I228f., Gschnitzer, "Proxenos" in RE

Sup. XIII, Michell, Sparta, 1964, Cambridge, 152.

(16) 不動産所有の制限については、馬場恵二「アッティカにおける非市民の不動産所有」史学雑誌 71-8(1962)参照。訴訟手続上の不利については、Antiphon V番弁論にミュティレネ市民がアテナイ人殺害容疑で略式逮捕され、十分な訴訟準備もないまま民衆裁判所 Heliaia で公判を受けさせられた例が見られる。プラトンはメトイコイの滞在を20年に限るとする、Leg.850B. cf. Morrow, Plato's Cretan City, 1960, Princeton, 147.

(17) e.g.Od.9.34f. cf.W.Hoffmann,Die Polis bei Homer,in Festschrift f.B.Snell,1956, München, 155.

(18) cf. Phillipson, The International Law and Custom of Ancient Greece and Rome, 1911, London, vol.I 127.